



所沢航空発祥の地

この冊子の表紙絵は“航空発祥の地”をイメージして、安彦良和さんが描いたものです。所沢飛行場での初飛行を成功させたアンリ・ファルマン機と同機のパイロットである徳川好敏氏がモチーフとなっています。



▲ 徳川好敏氏

所沢市が“日本の航空発祥の地”とされるのは、1911（明治44）年、に「日本初の飛行場が開設されたこと」によります。ライト兄弟による人類初の動力飛行からわずか7年半後のことです。

1909（明治42）年、日本の航空研究を進めるため「臨時軍用気球研究会」が設立され、初めに手がけたのが「欧州での飛行機調達と操縦法の習得」、そして「飛行場の建設」でした。首都近郊の候補地から地形・気象条件・交通至便などにより、最もふさわしい場所として選ばれたのが所沢です。



▲ 所沢の空を飛行するアンリ・ファルマン機

その後も初めての航空研究施設、飛行機設計製作所、操縦や整備の学校などが作られ、ここ所沢から“日本の航空”が始まったのです。



▲ 開場まもない頃の所沢飛行場とアンリ・ファルマン機

写真提供（複製禁止）
一般財団法人 日本航空協会、
三上博史氏



▲ 現在も航空公園駅前にはYS-11機が展示されています



▲ 安彦良和氏と愛犬めめ子

やすひこよしかず 安彦良和氏

漫画家、アニメーター、アニメ監督。
所沢市に住んで46年。アニメーターとして『ムーミン』、『宇宙戦艦ヤマト』、『勇者ライディーン』、『超電磁ロボ コン・バトラーV』などに携わり、社会現象を巻き起こした『機動戦士ガンダム』ではキャラクターデザイン・作画監督を務めた。その後アニメ監督として『クラッシュジョウ』『巨神ゴッグ』『ヴィナス戦記』を手掛けた。
1980年代後半からは漫画家として『ナムジ』（日本漫画家協会賞優秀賞）、『虹色のトロツキー』、『王道の狗』（文化庁メディア芸術祭漫画部門優秀賞）、『韃靼台風』など多くの作品を生み出し、『機動戦士ガンダム THE ORIGIN』は累計発行部数1,000万部を超える。



© 創通・サンライズ 発行：KADOKAWA

安彦良和氏 特別寄稿

「所沢に住んで…」

ちょうど50年前、僕は東京に出てきた。梅雨の湿気のまだ残る中へ、だ。湿気も不快だったが、その後に来た猛暑にもまいった。たまたま、なけなしの金で扇風機を買い、それにしがみついて一夏をしのいだ。

東京、と言ったが、住んだのはまだ北多摩郡だった清瀬町だ。それから職場だった虫プロダクションに近い練馬区に出、こどもが出来たので家賃の安い所沢に越した。たった三年で「都落ち」したことになる。

「落ちた」身で言うのもなんだが、東京は馴染めない町だった。とにかく大きすぎる。そして、つかみどころがない。

北海道の山村育ちだから、町の暮らしにはあこがれていた。その「町の代表」が東京だから、本来、多少つらいことがあっても東京にはしがみついているべきだったのだろうが、どうも愛着が持てなかった。

所沢の魅力は平地林にあり

そんなことから所沢に家建て、二軒目の家も建てて「当分の間は住もう」と心決めした。その辺りから数えても、もう三十年以上になる。

所沢に愛着を感じだしたのは二軒目の家に住むようになってから、だろうか。駅までが程よい距離だったこともあるが、少し年を経た住宅街で、そこに平地林が点在していたことが良かった。

「まるで軽井沢だ」というのは軽井沢になぞ行ったこともない者の冗談だったが、小さな雑木林達の風情はじっさい味わいがあった。北海道育ちだから、樹木というものは紅葉して冬には葉を落としてほしいという要望がある。だからまだ上京する前、たまたま見た神宮外苑の常緑の木々に僕は強い違和感を持ったものだった。その点で、武蔵野特有の雑木林

東京には「町」というまとまりがない。「浅草」とか「下北沢」とか「阿佐ヶ谷」とか、そういう小さいまとまりに依存して住むのが東京暮らしなのだということには後で気付くのだが、どこまでも家並みが続き、山も空もなく、どこへ行き、なにをするにも電車に乗らなければならない東京は、僕のような生粋の田舎者にはちょっと不向きだったのだ。

だから、所沢の印象は「ここは町だ」というものだった。駅から伸びる商店街があり、その中心に市役所があり、アパートからは狭山丘陵から続く山並みが見え、町はずれはあきらかに「田舎」の様相を呈した畑地と雑木林に接している。しかも、都合のいいことに東京はすぐお隣だ。「お住まいはどこ？」なんて出掛け先で訊かれても、少々の良心の呵責に耐えれば「東京」と答えてもそうウソにはならない。

はい。最初の家に近い三富の広い林も良かったし、現在住んでいる榎町界隈の小さな平地林も良かった。

「かった」と過去形になるのは、残念ながらその後、バブル期の宅地開発や車庫法*改正等の影響でみるみるその林が失われていってしまったからで、我が家に近いそれも絶滅寸前の状態にある。

幸い、武蔵野の林は近年見直されて来つつある。人里にある平地林の価値が、である。百年前、国木田独歩が感動して描いたのは三鷹辺りか、或いは巣鴨のはずれ辺りの景だったのだろうが、現在、それに最も良く見合うのはたぶん所沢だ。大事にしたいものである。東京に近い、だが、あきらかに東京とは違う良さ情景のひとつとして。

*「自動車の保管場所の確保等に関する法律」の通称。1991（平成3）年の改正により、駐車場需要が大幅に増加した。